

第1回

アートって何？

執筆・講師
上野行一

今回学ぶこと

何のために美術を学ぶ？ そもそも美術って何？ 1年間かけて考えていきましょう。
絵画、彫刻、製品デザイン、アニメ。私たちの暮らしは、実は美術と深く関わっています。
作品を鑑賞したり作家に話を聞いたりしながら、美術の扉を開いていきます。

これから美術を学ぶにあたっての心構え

「アートって何だろう？」という疑問を持ったことはないだろうか。

本物そっくりに描かれた絵もあれば、落書きのような絵もある。今にも動き出しそうなりアルな彫刻もあれば、石や金属の塊のような立体作品もある。これが全部アートだというのがよく理解できない。世の中にはよく分からない作品や変な絵がたくさんあるが、大切なことは、分からないからと言って逃げないことだ。アートって何だろう、という疑問を持ち、問い続けながら1年間学んでいこう。1年経ったら自分の中に「私にとってのアート」の輪郭が見えてくることを願って。

美術を学ぶことの意義

アートは非日常の体験をすることだと言われている。しかしそれはアートの一面に過ぎない。アートは美術館の中だけに存在するものではないからだ。

私たちは作品を解釈し制作する過程で五感を使って感じ取り、想像力を発揮する。そうした経験はアートの場合だけでなく、日常生活におけるさまざまな場面で生かされている。

アートは感覚を磨く。私たちがふだん気に留めない色彩や形の美しさや面白さに気づかせてくれる。感覚を研ぎ澄まして世界を見ると、見過ごしていた問題に気付いたり、見つけた問題をいろいろな視点から考えたりすることができるようになる。

アートは想像力を鍛える。物事を一面ではなく多様な視点で見たり、その意味や背後にあるものを想像する力と態度を育ててくれる。

同じものを見ても人は違う見方をする。一人ひとりの感覚や知識、見方や考え方が違うからだ。この世界はそれぞれの人が自分の頭の中で作り上げたもので、誰もが同じ世界を見ている

わけではない。多様性に気付くことは世の中の見方を豊かにし、自分を成長させてくれるに違いない。

どのように美術を学んでいけばいいのか

アートの答えはひとつではない。あなたと隣の人の答えが同じでなくていい。作品を鑑賞したり何かを表現したりするとき、その解釈や表現は人の数だけある。大切なことは、対象や課題に真剣に向き合い、自分の解釈や表現を生み出すこと。そして次に、みんなと意見を交流しあって多様な見方や考え方を知り、もう一度自分の解釈や表現を振り返って深めることだ。独りよがりではない自覚と自信に裏打ちされた自分の解釈と表現が生まれることを目指して学んでいこう。



第2回

美術館

執筆・講師
上野行一

今回学ぶこと

インターネットや図版でもアート作品に触れることができる。でも実際の大きさや質感など、美術館に行かないとわからないことも多い。美術館では学芸員たちが、作品の並べ方を考えたり。アート作品の鑑賞のしかたを伝えるワークショップを開催するなど、作品の魅力を引き出すさまざまな工夫をしている。実際の展示の様子を見ながら、どんな工夫をしているか見てみよう。

美術館の役割

美術館は何をするところだろう。作品を展示し展覧会を開く所だと思われるかもしれない。しかし、それだけが美術館の役割ではない。展覧会を開くためには作品や作家を調査し、研究することが不可欠である。また、作品を最適な状態で維持するために温度や湿度を適切に保つことや、破損や汚損、劣化などを修復することも大切な役割だ。

これらの〈企画・展示〉〈調査・研究〉〈修復・保存〉は、美術作品という「もの」を扱う視点から見た美術館の役割といえる。

近年は社会貢献などを含む〈教育・普及〉が美術館の現代的な役割として注目されている。来館者や社会に対して美術館は何ができるのか。つまり「もの」ではなく、「ひと」や社会に対して何ができるのかという視点から見た美術館の役割が問われている。こうした視点を通して社会的存在としての美術館の役割を理解したい。

新しい美術館コンセプト

21 世紀に入り、美術は愛好家だけではなく、経済界や他分野からも注目されるようになった。その根底には、常識に縛られない考え方や新しい発想を生み出す美術の特性が、Society5.0 と呼ばれる科学技術の進展が生み出す新しい社会で求められる創造性や革新性、イノベーションの基礎になるという考え方がある。

2017 年の世界経済フォーラムでは「デジタル時代で最も創造性に富んだイノベーションは、アートと科学を結びつけることができる人たちによってなされている」と、ウォルター・アイザックソン*が語った。これまで美術館は感動や癒しの場として、また文化的教養を高める場として捉えられることが多かったが、美術に新しい期待が寄せられているなか、美術館にも新しいコンセプトが求められているといえよう。

*作家としてスティーブ・ジョブスの伝記を執筆。アスペン研究所所長。



第3回

鑑賞

執筆・講師
上野行一

今回学ぶこと

「美術作品の見方がわからない」ということはないでしょうか。何が描かれているのか？ 作者のメッセージは何なのか？ 一見してもわからないと感ずることがあるはず。今回は美術作品の「鑑賞」について学びます。

美術の約束事

美術って何だろう。美術作品それ自体が美術なのだろうか。

フランスの批評家ロラン・バルトが述べたように、書物は書架に置かれている限りは単なる紙の塊に過ぎず、文学作品は読者の存在があつて初めて文学になる。美術作品についても同様だ。美術作品（アートワーク）と美術（アート）とを区別して考える必要がある。これは美術を考えるときの基本的な約束事でもある。

美術は美術作品の中に自己完結的に存在するものではなく、鑑賞という行為の中で見ると美術作品の間に生じる現象である。美術作品は人に鑑賞されて初めて美術になる。パブロ・ピカソはこう言った。作品は見る人によって初めて生命を与えられる。つまり、見る人がいなければアートは存在しない。積極的に鑑賞し、あなた自身の美術をつくり出そう。

鑑賞を楽しむ手がかり

観察し想像し情報を理解して解釈する。これが鑑賞の基本的な手順だ。まず時間をかけて自分の目でしっかりと見ること。すると、意外にもいろいろなものが次々と見えてくるはずだ。目に映ってはいても実は見えていなかった形や色彩が見えてくる。そして、それらのつながりや関係性に気づくと鑑賞は楽しくなってくる。

次に「これは何だろう」「何の場面だろう」などと疑問を持ち、想像を働かせて謎を探究してみよう。その際、作品の中に入ってみたり、表情やポーズをまねてみたりして、作品と自分との距離を縮めると作品の世界が実感できる。実際はそこにはない匂いや音までも感じられるようになる。人物が表現されていたら、その人が何と言っているかを想像するのもよい。

できたら、他の人と話し合い、感じたことや考えたことを比べてみよう。同じものを見てい

るのに、人は違った見方をしていることに驚かされることだろう。美術作品は自分を映す鏡なのだから。

また、作品には制作した作家の意図や情熱だけでなく、制作当時の社会における思想や風俗、文化も反映されているので、美術作品は時代を表す存在とも言える。一とおり鑑賞したら、添えられている説明文を読んだり情報を調べたりして、表現の特徴や様式、作者の意図、時代背景などを理解することも大切である。

こうした手順を踏んで最終的に自分なりの解釈を築き上げることができれば、有意義な鑑賞になるだろう。

約束事に沿って鑑賞する

番組ではニューヨークの美術館で行われている「探究的な鑑賞」を紹介する。一つのテーマに沿って複数の作品を鑑賞し、そのテーマについて探究するという鑑賞方法である。

美術作品を通して探究するテーマはさまざまである。性格やアイデンティティーのような生き方に関わるようなテーマもあれば、ジェンダーや気候変動のような現代の社会的テーマもある。「美術の約束事」で説明したように、美術作品＝美術ではなく、美術作品を鑑賞することによって生じる現象を美術と捉えたと、美術作品それ自体を理解するための鑑賞も、美術作品を通してテーマについて探求する鑑賞も、どちらもあなた自身の美術をつくり出す営みにほかならない。

第4回

色彩と感情

執筆・講師
上野行一

今回学ぶこと

赤色は情熱的なイメージ、青色はクールなイメージ。色の違いによって私たちはさまざまな感情を呼び起こされます。また色は組み合わせることによって受けるイメージが変わります。同じ色でも組み合わせによって違う色に見えるのです。今回は色彩について学んでいきます。

色彩から受ける印象

私たちは日々、さまざまな色に囲まれて暮らしている。色は私たちの心に働きかけ、感情を引き起こす。色によって気持ちを変えたり、気持ちを表したりしているのだ。

たとえば、スーパー戦隊シリーズのメンバーには、それぞれに色が付けられているが、私たちは色からメンバーの性格や役割を感じ取っている。赤はリーダーでパワフルとか、青は冷静で知的な感じなどという具合に。

また、人は色彩と味覚を無意識に結びつけている。赤いパッケージのお菓子を見て辛そうだなと感じたり、水色のパッケージからクールな感じや爽やかさやを感じたりしたことはないだろうか。これは色から自分の経験や知識が呼び起こされるからである。つまり色には人の気持ちを動かす力がある。これは美術にとっても大切な要素だ。

色の見え方の違い

同じ色でも周りの色に影響されて違う色に見えることがある。それには色の対比と色の同化の二つの種類がある。

ある色の周りに明るい色があると、その色は暗く見える。逆に周りが暗い色だとその色は明るく見える。このように色の対比では対になった2色の違いが強められて見える。色の対比は色の三属性である明度、色相、彩度で起こり、それぞれ明度対比、色相對比、彩度対比という。

また、色の上に色線を足すと元の色は足された線の色に近付いて見える。これを色の同化という。赤いネットに入ったみかんの色は赤みがより強く見える。これは色相の同化が起こるからだ。

色は組み合わせでその見え方が変わることを理解し、色の見え方の違いに注目することは、絵を描くときはもちろん、生活の中でも役立つことだろう。

色の組み合わせ

色と私たちの生活は深くかかわっている。効果的な色の組み合わせ方について考えてみよう。
色は色相と明度と彩度で表すことができる。同じ色相の色でも明度や彩度の違いで「うすい」「あざやかな」「にぶい」など、感じ方の違う色がある。このような色の感じの違いをトーン（色調）という。

私たちは色のトーンごとに違う印象を受ける。例えば「かわいい」という感じは「うすい」トーンから生まれる。「うすい」トーンから色相の違う色を組み合わせると「かわいい」という印象が強調される。

色のトーンは美術の時間に活用するだけでなく、ファッションや身の回りのものなど、生活の中でも効果的に生かすことができる。

●次の絵から受ける印象を書いてみよう。







このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。

第5回

光と影

執筆・講師
上野行一

今回学ぶこと

「光と影の魔術師」と呼ばれるレンブラントの作品では、人物にあたる光をたくみに描くことで劇的な効果を生み出しています。この技法は、現代の映画や舞台でも活用されています。またルノアールは、木漏れ日を浴びて踊る人たちの影をさまざまな色で描きわけました。光と影の技法と効果について学びます。

光と影から受ける印象

物の表面の光が当たらない部分を「陰」、光を遮って物自体がつくり出す形を「影」という。光の方向によって陰影のでき方は変わり、その印象もまた変わってくる。陰影を表さずに描くと、絵は平板な印象になり、レンブラントのように光や影を極端に際立たせるとドラマチックな印象になる。

光と影から受ける印象そのものを描こうとしたのが、ルノワールなど印象派の画家たちだ。彼らはアトリエから外へ飛び出して自然の光の中で事物を観察し、光による色の変化や特徴、その陰影にまで色を見いだして風景を色彩豊かに表現した。

私たちは光の中で生活しているため、その存在をふだんは意識することがない。木漏れ日の美しさにふと気づいて歓声をあげたり、不思議な形に伸びた影を見て面白く感じたりするとき、光や影の存在を強く意識する。それは単に目に映ったものを認識したのではなく、感情が揺さぶられた結果だといえる。

光をどのように扱うかによって絵の印象は大きく変わる。作品を制作するとき、光と影に意識を向けることによって新しいひらめきが生まれるかもしれない。

光と影の関係

西洋では古来より絵画表現に光と影が意識され、ルネサンスのころにはその効果を用いた表現が広く浸透するようになった。一方、東洋では線描を重視し、光と影を意図的に描き表そうとする意識は少なかった。

番組で紹介する、レンブラント・ファン・レインの『夜警』とほぼ同時代に描かれた菱川師宣^{ひしかわもろのぶ}の『見返り美人』や、その約200年後に描かれた歌川広重^{うたがわひろしげ}の『東海道東海道五十三次 日本橋（朝之景）』には陰影が表されていない。

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。

この違いをどのように考えるとよいだろうか。光と影を絵筆で表す卓越した表現技術のレンブラントのほうが、画家としてより優れているのだろうか？ それと比べると、菱川師宣や歌川広重は表現が稚拙^{ちせつ}なのだろうか？

社会とその文化における表現の様式や、作者が表そうとすること（主題）によって表現のしかたは変わってくる。光と影を表す表現様式の違いによって単純に絵を評価することは正当ではない。表現技術の優劣と捉えるのではなく、絵に対する意識の違いが生み出した差異と捉えることが大切である。

レンブラントライティング

レンブラントの『夜警』。1642年に描かれたこの作品では、スポットライトのように光が斜め上から人物に当てられ、まるで舞台を見ているかのようなドラマチックな臨場感にひたることができる。光と影による演出は、『サムソンとデリラ』の再現実験からもわかるように、視覚的なインパクトを見る人に与えるとともに、登場人物の表情をより劇的に映し出し、その感情を伝えることに効果的である。

この斜め上から光を当てる手法はのちに「レンブラントライティング」と呼ばれるようになり、今でも、映画や演劇などで用いられている。

●光と影の効果をいかした作品は、ほかにどんなものがあるだろう？

☐教科書や本から探してみよう。

.....

.....

.....

.....

●身の回りで、光と影の効果をいかしたものにはどのようなものがあるだろう？

.....

.....

.....

.....

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。

第6回

人を描く

執筆・講師
上野行一

今回学ぶこと

ピカソやフランシス・ベーコンが描いた肖像画や人物画は現実にはありえない見た目をしていますが、その人が抱える悩みや苦しみが伝わってきます。人を描くときには、自分はこの人をどのように見ているのか、何に心を動かされたのか。その主題を表すためにはどのように表現を工夫すればよいのか考えてみましょう。

人体を知る

人体を知るということは、その目的によって意味合いが違ってくる。例えば医者にとっては人体の生理的機能の把握を意味したり、ファッションデザイナーには人体の動きや平均的なサイズの理解を意味したりする。では絵を描くときに、人体を知るとはどのようなことを意味するのだろうか。

人を描くとはどういうことかを考えてみよう。友人や自分自身など特定の人を描くということは、人体の模式図を描くわけではないし、平均的な身体や理想的な身体を描くことでもない。その人の特徴を捉えて誇張したり、描き方や画面構成等を工夫して、その人らしさを描き出すことだ。

人の顔はみな違う。肌の色も目や髪の色も、足の長さや体格も、人種や年齢、性差、障がいの有無などさまざまな要因によってみな違う。正しい人体などないのだ。その人に個別固有の人体を知ろう。

文化によって異なる人の描き方

番組で紹介するジャン＝ミシェル・バスキアが描いた人物の絵は稚拙とも思える。デッサンを元にした写真のような人物画とはかけ離れており、まるで落書きのようだ。なぜこのような絵が評価されるのだろうか。

人の描き方に限らず、表現様式が評価される背後にはその社会の文化や伝統、歴史的背景がある。たとえば印象派の作品は、今日もっとも愛好される代表的な表現様式だが、印象派が登場した19世紀末の社会では受け入れられず、大きな批判を受けていた。ピエール＝オーギュスト・ルノワールが、モデルの素肌に落ちる影を紫色や緑色を使って描いた裸婦の絵が、「腐

乱している」とやゆされたのはその当時の社会や美術界の絵画観にそぐわなかったからである。

バスキアのような傾向の絵が評価されるようになった背後には、社会や文化の、そして美術界自体の変容がある。文化によって人の描き方の評価は異なるのである。

特徴を見つけ、誇張して描く

人を描くとき、人の外見を捉えてその特徴を誇張して描くことは大切である。しかし、それだけではその人を描いたことにはならない。絵にはその人らしさを表現しようとする描き手の意図や情熱、つまり主題の存在が大切である。自分はこの人をどのように見ているのか、何に心を動かされたのか。その主題を表すためにはどのように表現を工夫すればよいかと考え、追究する過程が大切なのである。

番番組に招いた画家の木下 ^{きのした} 晋 ^{しん} さんになぜ難病の妻を描くのかと問うと「真剣に生きている姿が美しいから描く」。木下さんはそう言い切った。これが木下さんの絵の主題である。人を描くことは命を描くことでもあるのだ。

- 美術の教科書や本から人物を描いた作品を一つ選んでみよう。

作品名： _____

作 者： _____

- その作品からどんなことを感じたか、感想を書いてみよう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

第7回

風景を描く

執筆・講師
上野行一

今回学ぶこと

モネの晩年の作品は、私たちの目に映る自然とは大きく異なっていてまるで抽象画のようですが、とても強い印象を与えます。風景のとらえ方は人それぞれで、風景画にはそれぞれの「見方」が反映しているのです。画家の津上^{つがみ}みゆきさんの高校でのワークショップの様子や、自身の作品制作の過程を見ながら、風景画について理解を深めていきます。

視点

写真のようにリアルに描くだけが風景画ではない。自分の風景を見つけ、自分の感性で描くこと、人それぞれの主題、それぞれの発見を描き出すことが大切だ。そのためには、五感を解放し自分なりに風景を感じ取ることが大切であり、日常の風景を新しい視点で見つめるという態度が必要である。

風景を描くとき、写真を参考にする場合があるかもしれない。注意しなければならないのは、写真は視覚的な情報だけしか記録できないことだ。私たちはただ目に映る情報だけで風景を感じ取っているわけではない。例えば、光を「まぶしい」とか「心地よい」などと感じても、そうした感じ方は写真に写せない。私たちは、その場の暖かさや涼しさ、静寂や騒音、土の匂いや花の香りなどのさまざまな情報を視覚的情報と重ね合わせて風景を感じているのだ。レンズを通した風景は自分の目を通した風景と違うのである。

五感で感じ取った「自分の風景」を描くことが大切であり、その楽しさを味わってほしい。

遠近法

古来から人々は、3次元の世界を2次元の絵画に表す方法を工夫してきた。空間の視覚的な広がりを絵に表す技法として開発されたのが遠近法である。

遠近法にはさまざまな種類がある。番組で紹介する、クロード・モネの『ヴェトウイユのモネの庭』は線遠近法という技法を使っている。これは定められた点（消失点）に向かって、すべてのものが小さくなるように描く方法である。『ヴェトウイユのモネの庭』の消失点はモネの後妻となるアリスの家族である。

同じくモネの『積みわら 夏の終わり』では、手前のものは大きく、鮮明に描き、遠くのもののは小さくぼやかしている。ものの大小で奥行きを表す大小遠近法や、遠くの風景の色合いを淡くして奥行きを表す空気遠近法が用いられている。

一方、東洋では視点の位置を変えて異なる奥行き感を出す方法が中国で研究された。山水画の遠近法の原理である三遠（高遠、深遠、平遠）である。山を描くときに山の麓から山頂を仰ぐ高遠、上から見下ろす深遠、山上から遠方を見渡す平遠という三つの技法だ。

また、中国の技法を学んだ日本でも空間表現が工夫された。例えば室町時代の画家雪舟の「天橋立図」では、別々の視点が一つの画面に共存しているのが特徴だ。

遠近法による絵画表現は国や文化、時代によって異なっている。さまざまな遠近法があることを知り、工夫して風景を描いてみよう。



『天橋立図』雪舟^{せっしゃう}（16世紀）

遠い山々や天橋立は上空から見下ろす視点で描かれ、画面下、手前の山並みは水平の視点から描かれている。

第8回

建築と美術

執筆・講師
上野行一

今回学ぶこと

フランスで活躍した建築家ル・コルビュジエは鉄筋コンクリートの特性をいかすことで、機能的・合理的なモダニズム建築の基礎を築き、日本にも大きな影響を与えました。その後建築はポストモダニズムへと移っていきます。ポストモダニズムは何を目指したのでしょうか。また現代の建築は何を重視しているのでしょうか。今回は世界的な建築家の伊東豊雄^{いとうとよお}さんをゲストに迎え、一緒に考えていきます。

建築の美しさ

建築の美しさは多様である。バルセロナ（スペイン）のサグラダ・ファミリアのように、巨大な彫刻を思わせる装飾的な美しさもあれば、パリ（フランス）のエッフェル塔のように均整の取れた構造の美しさを感じさせるものもある。ル・コルビュジエの設計したサヴォア邸は端正な美しさだが、同じく彼が設計したロンシャンの礼拝堂は重厚かつユーモラスで有機的な美しさを感じ取る。

美しさは外観だけではない。建物の良さや美しさはむしろ、その中に入ってこそ感じる事ができる。奈良の今井町の伝統家屋は、中に入ると陰影が醸し出す落ち着いた空間が心地よく、ロンシャンの礼拝堂は、不規則に開いた窓の色ガラスから差し込む光が暗い内部に拡散し、乱舞し、美しく神秘的な雰囲気を生み出す。身近にある建築を眺めたり、その中に入ったりして、建築の美しさを味わってみよう。

建築設計とは

20世紀に建築設計は大きく変わった。ル・コルビュジエやフランク・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローエたちが主導した、機能性と合理性を重視した建築はモダニズム建築と呼ばれ、日本にも大きな影響を与えた。コルビュジエの事務所で学んだ前川國男^{まへかわくに お}や坂倉準三^{さかくらじゅんぞう}、吉阪隆正^{よしざかたかまさ}とその次世代の丹下健三^{たんげけんぞう}らが日本の建築界を牽引した。

しかし1960年代以降、公害や環境破壊が問題となるにつれて、機能性や合理性を追い求めてきた近代の価値観に疑問符が付けられる。それは建築にも及び、モダニズム建築からポストモダン建築へと変化が現れた。ポストモダン建築は合理性至上主義を批判し、モダニズムの理念である Less is more（少ないほうがよい）を Less is bore（少ないのはつまらない）^(注)

へと変え、歴史的な建築様式を引用したり、モダニズム建築が否定した装飾性や場所・自然・住民との相互性を復活させた。美しさの基準や価値は時代によって変わるのだ。

震災と建築

人々の防災に対する考え方を一変させた東日本大震災は、建築のあり方にも大きな影響を与えた。建築家の伊東豊雄は、自分がつくってきた建築が本当に建築なのだろうかという根本的な疑問を抱く。これまで考えてきた建築は、都市生活のための場所・施設に過ぎなかったのではなかったかと。

人々が安らげる場所としての建築とは何か。コミュニティが生まれるためには建築に何が必要なのか。被災した人々の建築に対する思いや希望、期待に共感した伊藤は、それらを自らの建築に対する姿勢の土台に据えた。そして震災を起点として建築のあるべき姿を模索し、自然とつながり、人々とつながるような建築を目指したのである。

建築に一つの正解はない。時代や社会が求めるものによって、また人々の考え方によって、建築は変化し続けている。震災はその一つの節目だったのかもしれない。

(注) Less is more はミース・ファン・デル・ローエの言葉。Less is bore はロバート・ヴェンチュリ言葉。文法的に正しくは Less is a bore.

第9回

日本美術

執筆・講師
上野行一

今回学ぶこと

日本美術には、絵画において陰影をほとんど描かないことなど、西洋美術とは異なる特徴があります。また、西洋絵画とは違った方法で奥行きを出す技法がとられていることもあります。画家の山口 晃^{やまぐち あきら}さんをゲストに迎え、日本人の独自の感性や美意識、そして日本美術の魅力について理解を深めていきます。

カワイイアート

京都国立博物館の公式キャラクターは「トラりん」。愛嬌のある着ぐるみが来館者を迎えてくれる。現代のご当地ゆるキャラやアニメのキャラクターのように見えるが、実は番組で紹介する江戸時代の絵『竹虎図』をもとにしている。

この絵の原作者は琳派の画家・尾形光琳^{おがたこうりん}。国宝『燕子花図屏風』で有名な画家だ。国宝作品の作家がこんなかわいい絵を描いていたとは驚きだが、こうした作風は「Kawaii」という言葉とともに海外の人々にも賞賛と共感をもって迎えられている*。「枕草子」にも「うつくしき（かわいい、の意味）もの」として、幼児のしぐさや雀の子の動きが記述されているなど、日本には古くから「かわいい」ものを愛でる文化があった。今や日本の「Kawaii」文化は海外にまで広まっている。

琳派

金箔や銀箔を貼っただけのシンプルな背景に大胆に誇張されたモチーフを配し、デザイン処理された装飾的な画面。^{たけや そうたつ}俵屋宗達から尾形光琳、そして酒井抱一^{さかい ほういつ}や鈴木其一^{すずき きいつ}へと続く作風の流れを琳派という。

光琳と抱一は番組で紹介する宗達の『風神雷神図屏風』と構図や技法がほぼ同じ作品を残しており、先代の画風へのオマージュと、それを継承する琳派の特徴がよく現れている。

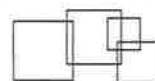
モチーフの特徴を捉えた描き方や装飾的で平面的な表現の根底にあるのは、写実や遠近法を重視する西洋の絵画とは異なる美意識であり、それは、次に説明するジャポニスムの流行とも相まって、欧米のアーティストに大きな影響を与えた。

* 2019年に大英博物館で開催された日本のマンガ展「The Citi exhibition Manga」では、『鳥獣戯画』に描かれているウサギがキャラクターで登場し、観客を案内した。この企画展は大英博物館史上最高の観客動員数を記録した。

ジャポニスム

19 世紀中期から後半にフランスを中心に起こり、欧米諸国からアメリカにまで広がった日本美術ブームを指す。日本美術と出会った欧米のアーティストたちは、平面性や装飾性、大胆な誇張と構図など日本美術の特質を自分たちの芸術表現に採り入れた。特に、ゴッホやマネなどフランスの印象派の画家たちには多大な影響を与えた。イギリスでは、歌川^{うたがわひろしげ}広重の浮世絵を研究したホイッスラーが、1860 年代初期にはそこから採り入れた手法で作品を制作している。

番組では日本の美術が絵画に与えた影響を紹介するが、絵画の分野における影響が日本美術への関心の始まりではない。その 200 年も前、1659（万治 2）年からヨーロッパへの輸出が開始された伊万里の柿右衛門様式の磁器は、多くの人々を魅了していた。18 世紀になって磁器の製造に成功したドイツやイギリス、フランスなどでは、柿右衛門の図柄を写した磁器の生産を開始する。このようなジャポネズリー（日本趣味）の時代が前段階にあってジャポニスムは生まれるのである。



●美術の教科書や本から日本美術の作品を一つ選んでみよう。

作品名： _____

作 者： _____

●その作品からどんなことを感じたか、感想を書いてみよう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

第10回

複製

執筆・講師
上野行一

今回学ぶこと

ジョルジョーネの絵をもとにティツィアーノが作品を描き、そこからさらにマネが作品を生み出すといったように、複製は美術の世界で数多く行われてきました。ジャポニスムもその延長でとらえることができます。美術評論家の成相^{なりあい}肇^{はじめ}さんとともに、複製が果たしてきた役割や、作者の意図を考えていきます。

本物と複製

美術の授業で先生から「人のまねはいけないよ」と指導を受けたことはないだろうか。自分自身では何も考えずに、単に人の作品を模倣するような行為は表現とは言えないし、自分の作品を作ったとも言えない。

しかし何らかの表現上の意図があって、他者の作品を参考に新しい作品を作り出すことは、昔からあった表現の手法である。それらの表現を大きく捉えて複製と呼ぶことにしよう。

引用、参照、翻案、オマージュ、パロディ……。

これらはすべて複製という表現の多様性であり、その目的と機能を表している。

エドゥアール・マネやカミーユ・クロードル、森村泰昌^{もりむらやすまさ}らは先人の作品をもとに新しい作品を作っているが、その考え方や手法はそれぞれ違う。複製の考え方や手法は作家によって違い、ひと言で語ることはできない。だがそこに共通するのは先人の作品に対する愛着であり、敬意であることを忘れてはならない。

複製芸術の歴史

番組では、ジョルジョーネ『眠れるヴィーナス』を元にティツィアーノが『ウルビーノのヴィーナス』を描き、エドゥアール・マネが『オランピア』を描いた例を紹介している。これは、先人の作品へのオマージュ、つまり尊敬する作家や作品に影響を受けて作品を作った一つの事例である。

この例から前回（第9回・日本美術）で学んだ琳派を思い出した人もいるだろう。

俵屋宗達^{たからや そうたつ}から尾形光琳^{おがた こうりん}、そして酒井抱一^{さかい ほういつ}や鈴木其一^{すずき きいつ}へと続く作風の流れを琳派というが、先代の画風へのオマージュと、それを継承する表現スタイルもまた広い意味での複製と呼べるか

もしれない。

また、19世紀後半、日本の浮世絵は西洋の美術界ととりわけ印象派の画家たちを中心に、彫刻家ロダンとその弟子カミーユ・クローデルへも大きな影響を及ぼした。こうした動向をジャポニスムと呼ぶが、その背後にも、他者の作品を参考に新しい作品を作り出す複製の考え方を見ることができる。

現代の複製芸術

複製の考え方や手法は作家によって違うが、一例として森村泰昌の場合を取り上げてみよう。

森村は絵画作品などに描かれた人物にふんし、他者の作品を通して自己を表すという手法で作品を作り上げてきた。描かれた人物と同じ衣装を身に付け、メイクを凝らしてそれに成り切った作品は、既成の作品に自己を投影した一種の自画像ともいえる。

彼にとって既成の絵を複製するという表現の意味は何だろうか。森村はマネの『オランピア』の複製を引き合いに出して、「絵と対話して自分自身の位置や意味を発見すること」と述べている。

森村はマネの作品を引用し再解釈をした。作品と対話し、対話を通して自分自身を発見し、作品をなぞる過程で新しい解釈が生まれた、ということだろう。

複製は、現代の美術界では重要な考え方や手法になっている。気になる作品について、作家がどのような考えで複製という手法を用いたのかを考えたり、調べたりしてみよう。

●番組に登場する3作品について、比較してみよう。

	『眠れるヴィーナス』	『ウルビーノのヴィーナス』	『オランピア』
誰が、 どこで、 何を している？			
表情、目線			
身に 着けている物、 近くにある物			

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。